

マッチングアプリで出会った
独占欲強めなスパダリ社長は
私を甘く誘惑する

プロローグ

「——私と、結婚を前提に付き合ってくれないか？」

目の前で柔らかな、しかし有無を言わせぬ確信に満ちた笑みを浮かべているのは、成瀬春翔
三十三歳。

パリッとした細身のスーツを着こなし、誰もが羨むルックスと地位を兼ね備えた彼は、結亜の勤
める会社の社長だ。

「結亜、君と結婚したいと思っている。……君も、そうなんだろう？」

東条結亜は、あまりの出来事に思考が停止した。

事務職OLとして平凡な日常を送っていたはずの自分が、なぜ今、二人きりの社長室で、高額の
花であるはずの社長から愛の告白をされているのか。

(……え？ 私もって、どういふこと……?)

彼のその自信満々な言葉に、さらに混乱が加速する。

結亜は自分のことを、どこにでもいる目立たない存在だと思いついでいる。

念入りに手入れした黒髪も、人一倍気を遣っている美しい肌も、愛嬌のある笑顔も、周囲に信頼

される話し方も、彼女にとつては最低限のたしなみに過ぎない。自分に多くの視線が注がれている自覚など、これっぽっちもなかったのだ。

だからこそ、今の状況はもはや異次元の出来事だった。

なぜ、社長が私を？ それに、なぜ、両想い前提のような口ぶりなのか？

結亜はパンク寸前の頭で、今、目の前で何が起こっているのかを必死に理解しようとしていた――

第一章 運命のアプリ

――先週末。結亜は眉間にしわを寄せて、スマホに表示されたアプリの画面を見つめていた。

彼女が見つめるのは、巷で流行中の『DE@TE―デート―』。

このマッチングアプリはカップルの成約数が多く、その後結婚に至るまでの報告も多いという。

恋人探しや結婚相手探しをしている人たちから評判のアプリだった。

現在恋人のいない結亜は、周囲からの結婚や出産報告に密かに焦っていた。

こういった連絡が増えるのと比例して、必然的に出会いの場――異性のいる場へ行こうという誘いは減っている。結婚式であれば新郎新婦の友人と出会えることもあるが、実際問題、簡単に話しかけたり連絡先を交換したりすることは難しい。

今まで付き合い合ってきた男性たちとも、どこか相手の押しに負けて付き合い合ったところがあり、まだ心の底から好きと言える相手には出会えていないような気がしていた。

だから、別れる時もあっさりとしていたし、そこから次の彼氏ができなくても特に気にしていなかった。異性の誘いも、面倒だからと断る時もあれば、気が向けば適当に乗ることもあり、本当に友達としての付き合いばかりしていた。……自分からは。

（そろそろ、将来を考えられる彼氏が欲しい。子供も欲しいし、それまでは夫婦水入らずで出かけ

たりできるような……)」

悩んだ末に、結亜はアプリへの登録を決めた。

「……ええい、ままよ！」

——このたった一回のマッチングアプリ登録が、自分の運命を大きく変えるとも知らずに。

「……で？ 何をすれば良いのかな……？」

人生で初めてのマッチングアプリ登録。

手探りでプロフィールを整え、漢字をひらがなに変えて「ゆあ」として登録を済ませた。

アプリで彼氏を見つけた友人にもらった情報を元に一生懸命プロフィールを考え、実物と離れすぎない程度に盛れた写真を撮る。

「これで、良いかな……？」

何か試験でも受けるような緊張感に包まれながら、結亜は登録ボタンをタップした。

「お、押しちゃった……！ だ、大丈夫かな？ 変なところ、なかったかな？」

ドキドキと落ち着かない感覚のままアプリを見ると、トップ画面に「イベント開催決定！」という文字が躍る。

「ん……？ マッチングアプリでイベント……？」

初心者の結亜には、アプリでのイベントとはどんなものなのか想像もつかなかった。

興味本位でバナーをタップすると、そこに書かれていたのは『マッチングアプリ登録者が参加で

きる、リアルなマッチングイベント』、つまりオフ会の案内だった。

「へえ、こんなあるんだ」

よくよく説明を読むと、アプリがリリースされてから初めて行われるイベントだという。

お試しの開催らしく、参加者は抽選制、大きなレストランを貸し切った食事がメインのようだ。『実際に会って話してみたいけど、なかなか初めての相手を誘うには勇気のいる人たちへ』とキヤッチコピーが添えられている。

マッチングしても、メッセージ止まりで終わってしまう。会いたいけれど、何を話して良いかわからない。そもそも相手は本当に実在するのか、変な人だったらどうしよう……

そんな、結亜のような一步を踏み出せない人たちの不安を丸ごと引き受けてくれるような企画だった。

申込期限は今日までで、抽選発表も本日中に発表されるという。

イベント当日まではあまり日がなかったが、カレンダーを確認すると、その日はたまたま予定のない休日だった。

「……これって、ちょっとした運命じゃない？」

迷っている暇はない。そう背中を押されたような気がして、結亜の心は決まった。

「いいじゃん、これ参加してみようかな。外れたら縁がなかっただし、当たったらラッキー。お試しで参加するぐらいの気持ちなら、もしダメでも落ち込まなくて済むよね」

マッチングアプリに登録して、自分から積極的に彼氏を探してみるという、自分の中で比較的

ハードルの高い出来事をクリアした今の結亜にとって、イベントへの参加は今までよりも身近なものとなっていた。おかげで申し込みに至るまでの時間も早かった。

最下部のフォームから申し込みを済ませ、当落の結果を待つことにした。

——そして、その日の夜。アプリから一通の通知が届いた。

イベント参加当選のお知らせに難しい顔をしてそわそわしていた結亜の表情が一気に綻ぶ。

それからは忙しかった。会社帰りに新しい服とメイク用品を買い込み、友人にアドバイスをもらって、いよいよ迎えたイベント当日——会場のレストランは広くて明るいレストランで、結婚式披露宴会場に使用されるような場所だ。参加者はゆうに五十名を超えているように見えた。

ドレスコードは特になかったが、女性はワンピースやロングスカート、男性はスーツを着ている人が多いように見えた。

結亜も艶のある黒髪を緩く巻き、新調したワンピースをまとっていた。周囲から浮いていないことにひとまず安堵したが、会場を包むキラキラとした熱気に、どうしても気後れしてしまう。

(……うう……。場違いではなさそうだけど、もうグループができてるみたいだし、声かけるのは勇気がいるな……)

喉を潤すためにドリンクを手にとると、結亜は会場の端、静かな壁際へと向かった。壁にもたれかかり、オレンジジュースへ口をつける。日中のイベントということもあってか、アルコール類の提供は行われていないようだ。

全体を見渡してみると、壁際から眺める会場内には様々な人間模様があった。

にこやかに話をする男性、どこか華やかさのある女性。話相手を探してキョロキョロと歩き回る人がいれば、多くの異性に囲まれて中心になっている人もいる。

一方で、料理を山盛りに取って食べることに夢中な人もいれば、一切それらに参加せずただひたすら椅子に座り続けている人もいる。

(今の私は、あの人たち寄りかな。あー、どうやって話しかけよう……)

思わず苦笑いを浮かべながら、結亜はグラスに残っていたオレンジジュースを飲み干した。

おかわりを取りに行こうとした、その時。自分と同じように壁際で、手持ち無沙汰にドリンクを片手に立っている男性が目に入った。

(なんだか、私と同じことしてる……)

不思議な親近感を覚えた結亜は、新しいドリンクを受け取ると、吸い寄せられるようにその男性の元へと向かっていた。

「……あの。お隣、いいですか？」

「え？ ええ。あ、どうぞ」

「失礼します」

不意の問いかけに、彼は少し驚いたように結亜を見つめたが、すぐに穏やかな仕草で場所を空けてくれて、結亜は彼の隣に並んだ。

声をかけた当初、彼は少し驚いた顔をしたが、すぐに何事もなかったかのように手元のドリンク

を口にしていた。勇気を出して、結亜は口を開いた。

「えっと、結構人が来てるんですね、このイベント。抽選だし、もっと少人数かなと思ったんですけど」

「……ああ、たしかにそうですね。応募者の数によって当選人数も変わるって書いてありましたし、参加希望の人が多かったんでしょうね」

「あ、そうかもしれないですね。ラッキーかなって思ったんですけど。なかなか自分から声をかけることができなくて」

「僕もです。勇気がいるというか、こういう場で自分からいくのは……なんだか苦手で」
彼も同じ思いだったのか、結亜に向けて柔らかい笑みを向けている。

「わかります！ 勇気いりますよね。私も、もうグループができてみたいに見えちゃって、声をかけづらくて」

結亜の話に、彼はしっかりと耳を傾けて受け答えしてくれた。それだけで、思い切って声をかけてよかったと胸を撫でおろした。

その時、ふと彼が誰かに似ているような既視感を覚えたが、知り合いなら気付くはずだ。気のせいだと思い直す。

「よかったら、少しお話ししませんか？ せっかく声をかけていただきましたし、気が合いそうだなと思います」

「私で良ければ！ ……たしかに、せっかく抽選に当たったのに、何もしないで帰るのは寂しいですよね」

「ですよね。ええっと、お名前は？」

「ゆあ、です。そのまま、自由に呼んでいただければ」
「僕はハルトです。お好きにどうぞ」

ハルトと名乗った彼は、背がすらりと高くスマートな男性だった。スーツは着ておらず私服のようだが、清潔感があり、無造作に整えられた黒髪がよく似合っている。

眼鏡越しに見える瞳はどこか理知的で、一見すると少し硬い印象や、無表情な時は怖そうにも見える。ひとたび口を開けばその声は驚くほど落ち着いていて、結亜の耳を心地よくくすぐった。優しい笑顔やふわりと漂う爽やかな香水の残り香も相まって、結亜は自然と心がときめく気がした。

どうしてとはまだはっきり言えなかったが、今まで付き合ってきた男性たちとは明確に何かが違う気がした。結亜は気が付くとハルトの独特の佇まいに惹かれていたのだ。

「……あれ？ そのキーホルダーもしかして……」
「えっ？ あ、これですか？」

ハルトが指さしたのは、結亜のバッグから転がり出していた猫のキーホルダーだった。
ぬいぐるみのついたキーホルダーで、ぬいぐるみの部分が見えないようにバッグの中に入れていたのだが、くるりと回って表に出てきてしまったらしい。

（しまった……！ どう考えてもこの場所につけてくるような物じゃないよね!? もっとオシャレ

なバッグチャームなら良かったのに……)

場違いな趣味を笑われるのではないかと、結亜は一瞬後悔した。だが、ハルトの言葉は意外なものだった。

「もしかして、あのゲームのキャラじゃないですか？」

「そうなんです！ ご存知ですか!? マイナーな作品だから、あんまり知っている人がいないんですよね」

「ちよつと毒があるけど、仲間思いで可愛かったですよね。僕も大好きで……って、あれ？ このキャラクターって、服を着てましたっけ？」

ハルトの言う通り、キーホルダーのキャラクターは、元々服を着ていない。

「これ、私がつったんです。お恥ずかしながら、素人の趣味なんです……」

「すごいじゃないですか！ 知らない人が見たら、既製品にしか見えませんよ」

「嬉しいな、ありがとうございます！ ……あ、あの。もしよかつたらなんですけど」

結亜はバッグにつけていたキーホルダーを外すと、ハルトへ差し出した。

「家にたくさんあるので、もし迷惑でなければおひとつどうですか？」

「いいんですか？」

「はい！ ゲームを知ってる方に出会えて嬉しいですし、新しい洋服を作る口実にもなりますから」

「嬉しいなあ！ 全然、迷惑なんてことはないですよ。なんだか懐かしいし……僕としては、ぜ

ひゅあさんとゲームやそれ以外のお話もしてみたいと思いました。こういう場だと、あんまりそういう趣味の話は敬遠されがちですから」

「ぜひ！ お話ししましょう！」

結亜はパッと笑顔を浮かべ、差し出されたハルトの手のひらにそつとキーホルダーを置いた。

「……それにしても、本当によくできていますね。売り物みたいだ」

「あはは、そう言ってもらえると頑張つて作った甲斐があります！ 裁縫は得意じゃないんですけど、せつかくやるならちゃんと作りたいなと思つて、結構頑張つたつもりです」

「バッグにつけるのはなんだかもつたないから、家に飾っておきますね。僕、そそっかしくて落としたり大変ですから」

照れくさそうに笑うハルトを見て、結亜も思わず笑った。

「……ゆあさんもこのイベントに来られているつてことは、アプリに登録されてるんですよね？」

「はい！ 初めて登録したので、全然勝手がわかっていないんですけど」

「このアプリ、お互いの相性チェックする機能があるんです。よかつたら、一緒にやってみませんか？」

「面白そうですね！ やってみましょう！」

ハルトの言う通り、アプリの中に二人の相性をチェックするクイズゲームのようなものが用意されていた。二択の選択肢の中から、自分がそうだと思うほうをタップしていくのだが、その結果をマッチングさせて、お互いどこまで意見が合うのか見ることができるとのことだ。

食べ物の趣味から好きなペット、相手に求める条件や自分の性格など……それなりに項目数が多いため100%は恐らく難しく、80%もあれば上出来の相性なのである。

「じゃあ、早速試してみましよう」

二人はお互いのスマホを出し合い、マッチングボタンをタップした。

少しずつ進んでいく検索中の画面に『マッチしています。しばらくお待ちください』の文字が踊っている。それを見てみると、結亜は今まで感じた事のない緊張感に包まれていた。

(もし、相性が悪かったらどうしよう……)

今更ながらハルトとマッチングされなかったらどうしよう、という不安が沸いてきたのだ。結亜が隣をチラリと見ると、ハルトは何も気にしていないのか、涼しい顔でスマホを眺めている。

やがて、画面に『マッチ完了』の文字が出た。

(ハルトさんは、どう思ってるんだろう……?)

「……どうかしましたか？」

視線に気が付いたハルトが、結亜に目を向けた。

「え、ああ、い、いえ！ 何でもないです！」

急に気恥ずかしくなり、結亜は慌ててハルトから視線を逸らした。

「あ、そろそろですよ」

スマホへ目を向けると、『マッチが完了しました。【結果を見る】のボタンをタップしてください』という画面に変わっていた。

「さあ、見てみましょうか？」

「え、ええ……」

結亜は恐る恐るボタンをタップする。

「……え、と……あっ！」

「……ああ、これは」

二人の画面のトップには、お互いの名前が表示されていた。

相性は、驚異の90%。

「あー！ 良かった！ ハルトさんでした！」

「僕のほうにも、ゆあさんが表示されていますよ。……すごいですね、相性90%だって」

「90%なんて、すごいですよね……？ 80%いけばいいって書かれているのに」

「マイナーなゲームと漫画が好きなのが大部分だったりにして」

「あはは、そうかもしれないですね！」

「それはそれで嬉しいですけどね。今まで、そんな女性はいなかったから。……良かったな、これだけ相性の良い相手がゆあさんで」

「わ、私もハルトさんで嬉しいですよ……！」

さらりと言つてのけるハルトに、結亜は顔を赤くしながらそう返すのが精一杯だった。

「少しだけ向こうのテーブルに行ってみませんか？ 美味しそうなお飯、食べなきゃもったいないかも」

「あつ、せつかくですもんね。行きましょう」

(……本当に良かった！これで相性悪かったら、気まずくて仕方なかったよ……)

結亜は、結果にほっと胸を撫で下ろした。

この時点で、結亜はもうハルトのことが気になって仕方がなくなっていた。ほんの少し会話をしただけなのに、初対面の彼に圧倒的な好意を抱いていたのだ。

こんなことは初めてで、結亜自身少し戸惑っていた。しかし、ハルトに笑顔を向けられると高鳴る胸の音を聞いて、既にハルトに恋をしはじめていることを自覚していた――

第二章 蜜愛の一夜

二人はテーブルから食事を取り、空いている席に着くと本格的に話し始めた。

先ほどのマッチングの結果があるため、話題には困らない。

お互いの趣味から食事の好み、普段の生活環境やルーティーンに仕事の話、友人の話や今興味を持っていることなど。気が付けば熱心にお互いの話を聞いていた。

「……そっか、ハルトさん、同じ業界なんですね。でも、私は事務だから、技術的なことはさっぱりで……」

「どちらかというと、僕も技術というよりはコンサルや営業に近い立ち位置ですから。でも、知っておかないと相手に迷惑をかけるので、勉強はするようにしています」

当たり前のように努力を語りながら笑うハルトのはにかんだ笑顔に、結亜の鼓動が速くなる。仕事だけでなく、常に勉強するのは大変だ。なのに、そんな様子は微塵も見せていない。

(ただ優しいだけじゃなくて、ちゃんと自分を持って前に進んでいる人なんだな……)

尊敬や憧れに近い感情が、結亜の中に芽生え始めていた。

「すごいなあ、私も勉強しようかなあ……」

「より仕事が面白くなったりもしますよ。僕は海外旅行が好きだから、英語もかなり勉強しま

した」

「そうなんですね！ 私、英語は苦手で……。でも、アプリやテキストで少しずつ頑張っているんです。海外旅行、良いですよ。海外の景色や文化って、実際に行かないと見られないものがたくさんありますもんね」

英語が話せるハルトを前に、苦手なことを明かすのは恥ずかしかったが、不思議と彼には打ち明けることができた。きつと彼の口から、否定的な言葉は出てこないだろうと思えたのだ。

案の定、ハルトは熱心に耳を傾けてくれる。

話し過ぎかと思っただが、嫌な顔せず聞いてくれるハルト相手に、楽しくておしゃべりが止まらなかつた。

「将来、子供ができて夫婦だけの時間も大切にしたいんです。二人でいろんなことに挑戦したり、出かけたりしたいなって」

「私もそう思います！ 子供のことも、自分のことも、両方全力で楽しみたいですよ」

「……ああ、こうやって将来の話をするの、本当に楽しいですね」

「ホントですね。……今までこんな話をする機会、なかつたですから」

結亜は大きく息を吐いた。

これまで付き合ってきた男性とは、こんなに真剣に未来の話をしたことはなかつた。

いつもなんとなくや、相手に押されて付き合っていたからだ。もつと相手と真剣に向き合っていたら、違った未来もあつたのかもしれない。この歳になって、結亜は今までの異性との付き合い方を後悔していた。

を後悔していた。

「……ゆあさんは、今までどんなお付き合いをされてきたんですか？」

「あ、えつと……。こんな話をしたら『え？』と思われてしまうかもしれないですが、私、今まで男性と真面目にお付き合いしたことがないのかもしれない、って。だから、いつもあつさり別れていましたし、未練を感じることもなかつたんです」

嘘ではない。けれど、初対面の男性、しかもマッチングアプリのイベントで出会った相手に言うような話ではない。

(こんなこと言ったら、引かれちゃうかな……)

一瞬、そんな考えが頭をよぎったが、彼になら話してもきつと大丈夫だと不思議と思えた。

「それが今になって『これで本当に良かったのかな』なんて考えるようになって。だから、こんなふうに将来の話ができること自体が新鮮で、すごく楽しいんです」

結亜は、はにかむように言葉を重ねた。

「でも、過去に真面目に話をしてこなかつたからこそ、今こうやってハルトさんとお話しできているんですよ。そう考えると、昔の自分にはある意味感謝なのかもしれないですけどね」

「……僕もそうですよ」

「……そう、ですか？」

意外な答えに結亜が顔を上げると、ハルトもまた、少し遠くを見るような目で微笑んでいた。

「ええ。女性に対して積極的になれるわけでもなく……。たしかに僕も人並みには恋愛してきまし

たが、どこか受け身というか、一方的な感情で成り立つ関係ばかりだったんです。昔はそんな自分に嫌気がさして、わざと仕事に没頭して女性を遠ざけていた時期もありました。ただ、もう僕も若い年齢なので、いつまでも消極的なままではいられないというか」

思いがけないハルトの告白に、結亜は驚いた。仕事でもプライベートでも、妥協せず前を向いて進む完璧な人だと思っていたのに、まさか恋愛にそんな不器用な一面があるなんて、と。

「ハルトさんも、色々あったんですね……？」

「ええ、まあ」

少し歯切れの悪い返事に結亜は首を傾げそうになったが、これ以上は踏み込んではいけないラインがあるはずだ——そう自分を律して言葉を飲み込んだ。

すると、ハルトがふっと表情を和らげ、まっすぐに結亜を見つめた。

「——でも、今日は思い切って参加して良かった。ゆあさんに会えましたから」

「えええ、あ、その……そ、そんなこと、急に言われたら……」

（恥ずかしくて、心臓が止まりそう……!）

告白とも取れるハルトの言葉に、結亜は顔を真っ赤にして俯いた。けれど、彼女自身も同じことを考えていたのだ。このままいけば、もしかしたら——淡い期待に、胸の鼓動が激しく刻まれる。

「照れます？」

「そっ……そりゃあ……!」

からかうような、けれど熱を帯びた視線。結亜がたじろいでいると、ハルトはスマートにそう切り出した。

「もし良かったら、この後、一緒に飲みに行きませんか？ お酒は好きですか？」
突然の誘いだったが、結亜にハルトの誘いを断る理由はない。結亜は胸を高鳴らせながら、ためらうことなく承諾した。

「お酒は飲めます！ ぜひ行きましょう！ ……でも、私、この辺りのお店、全然知らないんですよ……」

「駅から近いほうがいいですよ？ 帰りたくなったらいつでもすぐ帰れるように、駅のそばで探しますよ」

「あ、ありがとうございます……!」

さりげなく帰りのことまで気遣ってくれる優しさに、結亜はまた胸を打たれる。

自分のことを優先するのではなく、まず結亜の安心を第一に考えてくれる——そんな彼の振る舞いに、恋愛に慣れていないとこぼしていたこととのギャップを感じながらも、嬉しくて仕方がなかった。

「もっと落ち着いた場所で、ゆっくり話せたら良いなと思って。ここは人が多すぎますから」

「私も、ハルトさんとゆっくりお話ししたいと思っていました！ お誘い、嬉しいです」

「よかった。そう言ってもらえて嬉しいです」

結亜が素直な気持ちを伝えると、ハルトはホッとしたように口元を緩ませた。

このイベントはあくまで交流が目的であり、基本的にイベント内での公式なマッチング成立は

行っていない。あくまでもアプリ利用者の顔合わせと、普段アプリ上で声をかけづらいと思っている者たちが気軽に話せるように主催されたものだからだ。

運営側も、参加者同士が自由に仲を深め、連絡先を交換したり会場外へ出かけたりすることはむしろ歓迎しているようだった。

「あの、ゆあさん」

「はいっ？」

まだまだ終わる気配のない喧噪の中、ハルトがそつと耳打ちしてきた。

「このまま二人で、抜け出しませんか？」

「えっ、でも、まだ終わっていないから、怒られたりしませんかね……？」

意外と大胆なハルトの申し出に、結亜は目を丸くした。

「そもそも、男女が出会うためのイベントなんですから。出会った後は、会場を離れてしまっても問題ないと思いませんか？」

悪戯いたづらっぽく微笑む彼に、結亜も納得したように頷く。内緒でこっそり抜け出すなんて、まるでドラマのようなスリルに思わずドキドキする。

「……それもそうですかね？ こっそり、行っちゃいますか？」

「行っちゃいましょう！」

ハルトが目配せをした先は、スタッフが手薄になっている会場の出口だった。さっきまでスタッフが立っていたが、今は誰もいない。お互いの顔を見合わせながら、ハルトと結亜は人目を盗むよ

うに扉を開けて、誰にも気付かれることなく鮮やかな夜の街へと駆け出した。

会場を後にした二人が到着したのは、駅からすぐの場所にある洗練されたカフェバーだった。

「ここなら、食後のデザートも豊富ですし、ノンアルコールの種類も豊富なんです。最近できたばかりで、評判もいいみたいですよ」

「楽しみ！ 私、甘いものには目がありません」

「それじゃあ、早速入りましょう」

ハルトにエスコートされ足を踏み入れると、そこはスタイリッシュな照明が優しく灯る、落ち着いた空間だった。まだ新しい木材の匂いがふんわりと漂っている。夜景が一望できるカウンター席へと案内された二人は、大きなソファに並んで腰を下ろした。

「すごっ……。綺麗ですね」

「良い景色ですね。車のライトすらイルミネーションの一部に見える」

「本当に。わっ、メニューもおしゃれ……！」

子供のようにしゃぐ結亜を見て、ハルトは優しく微笑んでいた。

結亜は迷った末に、アルコールを注文することにした。メニューを彩る色鮮やかなカクテルへの好奇心、そして何より、彼ともう少しだけ大胆に話してみたいという高揚感があったのだ。

一口、また一口とグラスが進み、気付いた時には五杯目のカクテルを注文していた。

「……大丈夫？」

「は、はい……」

意識ははつきりしている。自分が何を話し、どこにいるかも理解している。ただ、心地よい眠気と、ふわふわとした幸福感に包まれていることは確かだった。

みつともない姿は見せまいと冷静に振る舞うものの、全身がぼやぼやと熱を帯び、アルコールが回っているのを自覚する。

けれど、その熱が結亜の心の壁を溶かしていった。

すっかりハルトに心を許していた結亜は、普段なら胸に秘めている会社の愚痴をぼつりぼつりとこぼし始めていた。

「で、ですわね？ 『セクハラなんじゃないかな』 って思う時もあるんですよ。でもやつぱり、手が上司や先輩だと、なかなか言いづらくて……」

「それは、そうだね。女性の先輩に相談したり、専用の相談窓口を使ったりはできないのかな？」
「窓口はあるんですけど大事にする勇気がなくて。私の一言で相手に迷惑がかかるかもと思うと、言ったことで何か弊害があったら怖いって気持ちが強くて……」

「……なるほど。……そう思わせてしまうのは会社の責任だね。じゃあ、周囲の女性たちのほうは？」

それまでリラックスしていたハルトの表情が、わずかに険しくなった。仕事に対して真摯な彼だからこそ、不当な環境を見過ごせないのだろう。そう思った結亜は気にすることなく話し続ける。

「同じ部署の年上の女性に相談したことがあるんです。……でも『それは、モチるっていう自

慢？』とか『昔はよくあった』とか、あまり親身になつて話を聞いてもらえなくて……」

「……そうだったんだね。それは辛いね」

「だからこう、もうこういう話ではできないなって諦めていたんです。でも、会社自体は好きだから辞めたくないですよ。他の人たちは気さくでいろんなことも話せますし、忙しい時期でもみんなと一緒に頑張れる！ って思えますし……」

少し俯き加減に話す結亜を、ハルトはじつと見つめ、深く頷きながら相槌を打つ。

「社長には面接の時に会ったきりなんですけど、今を輝くパーフェクトな男性、って感じで……」

結亜はそこで言葉を切った。

「女性の活躍や子育てにも理解も深くて、本当に素敵な方なんです。……あれ？」

結亜は改めて隣にいるハルトの顔を見た。弊社の社長は、有無を言わせぬオーラをまとったパーフェクトな男性だ。それなのに、結亜には一瞬、目の前のハルトの姿が社長と重なって見えた。

「……どうしましたか？」

「え、あ、いえ。急になんだかハルトさんが社長に見えてきて……」

「そうかい？」

「なんだか、雰囲気と横顔が……あれ？」

「……目の前にいる僕は、そんなに偉そうな感じかな？」

自嘲気味にそう呟くハルトに、結亜は慌てて首を横に振った。

「そうですよね？ おかしいな、変なの……」

「……似ているのかな？」

「なんとなく、そんな気がして。社長は女性社員にすぐ人気なんです！ 男性社員からも目標にされていますし。私も、素敵な方だなんてずっと思っていたので、つい……」

「そんな人が、マッチングアプリで恋人を探して、イベントにまで参加すると思えますか？」

「あれっ？ そっか、そうですね……？ すみません、変なこと言っちゃって」

結亜は申し訳なさそうに、胸の前で小さく手を合わせた。

「ふふっ。だいふ酔っぱらってきたのかもしれないですね？ ……送っていきまじょうか」

「えっ、そんな、悪いですよ……。家も近いわけじゃないし」

「でも、これだけ酔っ払っている女性を一人では帰せませんよ。何かあつてはいけませんし」

ふとした瞬間に見え隠れする独占欲のような優しさに、胸がむず痒くなる。

「……じゃあ、お言葉に甘えて……」

「ええ。遠慮なさらずに。……僕も、もう少しゆあさんとお話ししたいですし」

その一言に、結亜の心臓が大きく跳ねた。

「それは、私も……」

「それじゃあ、行きまじょうか？」

「あ、待つてください！ このスイーツ系カクテルだけ試させてください……！」

「あはは、遠慮なく。わかりました、あと一杯だけ飲んだら、帰りまじょう」

「はっ、はいっ！」

今までの結亜なら、初対面の男性の前では極力お酒を飲まないようにしていた。

それなのに、ハルトが相手だとこんなふうになつてしまったわがままも言えてしまう。

ハルトの前では、もつと一緒にいたい、甘えたいという欲求が素直に溢れ出す。

まだ会ってほんの数時間だというのに、驚くほど彼には素直に心を許している自分自身の心境の変化に、結亜は驚きつつも喜びを感じていた。

「……それから、もう敬語じゃなくていいですよ。僕が、敬語やめたいなつて思つてるだけなんですけどね」

「じゃ、じゃあ……」

「敬語なしでもいいかな？」

「もちろんです！ つあ、も、もちろん！」

敬語になりそうだったが、慌てて言い直す。

「少しずつ、慣れていけばいいよね」

「……うん！」

どうしても飲みたかった最後の一杯を頼んだ結亜は、子供のような眩しい笑顔でハルトを見た。

この美味しいカクテルを飲み終えるまでは、まだ彼と一緒にいられる。彼を独占できるその時間が愛おしかった。

そんな結亜の姿を見て、ハルトは仕方がないとも言うように、ふんわりと結亜の頭を撫でた。

「うろうう……」

「大丈夫？ 気持ち悪くない？ ……最後のが余計だったかな？」

「は、はい……そこは大丈夫……ご、ごめんなさい……」

「いや、良いんだ。ほら、着いたよ」

「ありがとうございます……」

意識はあるものの、足取りはおぼつかない。

ここまで色々なカクテルを試したからか、それとも最後のカクテルの度数が高かったのか、はたまたその両方なのか。結亜は一人で帰るには危ないと心配される程度には酔っ払っていた。

（気持ち悪くはない……でも、身体が熱くてフワフワする……。まぶたが落ちそう……）

「……ほら、気を付けて。鍵はある？」

「あ、あ……ここに……はいっ」

少し感覚の滲む指先で鍵を掴むと、ハルトの手へと落とす。ハルトは結亜を支えたまま、迷うことなく鍵を開けた。

「玄関まで入らせてもらうよ。女性を外に座らせるわけにもいかないからね」

そう言ってドアを開け、玄関へと入る。

これまでの恋愛では、相手の下心が透けて見えるのが怖くて、付き合ってもいない異性を家まで上げることは決してなかった。

けれど、ハルトだけは違った。彼の所作や言葉からは誠実さしか感じられず、何より結亜自身が、

この温かな時間を終わらせたくなかったのだ。

それに何より、まだまだ一緒にいたいと思った。嫌な顔一つせず、話をただ聞いてもらえたことは大きい。彼自身を優先にするのではなく、結亜を優先してくれている。

「ソファとかある？ 座ったほうが良いと思うけど。……そこまで運んだほうが良さそうかな？」

「す、すみません……」

「いや、謝らなくていいよ。思ったより、というか、見た目から想像できないくらいにアルコール度数の高いカクテルは多いから。先に言えば良かったね」

「……美味しくて、つい」

もちろん、味は美味しかった。それに何より、ハルトと二人で飲んでいる時間が特別で、楽しくて、止まらなくなっていたのだ。

「でも、止めるべきだったなど少し反省してる」

「ごめんなさい……」

「君のせいじゃないよ。……初対面の女性を酔わせて、家にも上がり込んで、ゆあさんに嫌われなにか心配なんだ。……これは、あくまでも僕の保身だけで」

ハルトの表情は、心から申し訳ないと思っっているように見えた。

「ぜ、全然！ そんなことありませんから！ 私がその、飲み過ぎたのがいけなくて……ハルトさんは悪くないもん……」

「……ありがとうございます。さあ、最後に水くらい汲んで帰ろうか。コップ、使ってもいいかな？」

「うん」

結亜をソファへ座らせると、ハルトは彼は手際よくキッチンで水を汲み、結亜に手渡した。

「はい。少しは落ち着いた？」

「あ、ありがとう……。うん、落ち着いた、かな……？」

「良かった。今日はもう無理しないで、早く寝るんだよ。いい？」

「うん……」

結亜の返事を聞き、ハルトはホッとした表情を見せた。

「それじゃあ、僕はこれで」

「あっ！ ま、待つて……！」

「ん？」

「あ、あの……」

とつさに結亜はそう思った。この状態でハルトがいなくなってしまう寂しさと、もっと一緒にいたいという気持ちとが入り混じり、気が付いたらハルトを呼び止めていた。

「どうかした？」

「あ、っと……」

（もっと話がしたい。もっと一緒にいたい。もっとハルトさんのことを知りたい。もっと、もっと……）

ここで別れても、またきつと会えるだろう。

だが、それでは遅い。今、どうにかしたい、と思った。

『まだ一緒にいたい』と伝えることは、彼女にとっては勇気のいることだった。

これまでの人生で一度も口にしたことはないし、言いたいと思える相手もいなかった。

自分に自信がなく、いつも受け身だった結亜が、初めて自分の意志でハルトを求めていたのだ。

「あ、の。も、もう少し一緒にいてほしいな、なんて……」

「……ゆあさん？」

その瞬間、ハルトの空気が変わった。彼が結亜に向けた視線は、それまでの優しげなものとは違う、熱を孕んだ重たいものだった。

「……いいの？」

低く響くその声が、結亜の身体の芯を震わせる。

「うん……。ハルトさんと一緒にいるのが楽しくて、その、帰っちゃうのが、寂しいなって……」

「でも、僕だって男だよ？ そんなこと言われて、無防備で抵抗の一つもできなさそうな女性を前にして、最後までおとなしくしてるのも難しいんだけど」

（……それって……？）

結亜はハルトの言葉の意味を理解した。けれど、後悔はない。いや、ハルトにならずすべてを許せると思っていた。

初めて、自分から相手のことをもっとよく知りたいと思えたのだ。一緒にいたいし、離れたくない。優しそうに見えるハルトが、そんな言い方をするのは少し驚いたが、そのギャップにも胸をく

すぐられた。

「その……べ、別に……私、ハルトさんなら、いい……」

「無理はしないで。酔った勢いかもしれないよ？」

「そ、そんなこと……ないです。私、自分からこんなこと言いたいと思ったの、ハルトさんが初めてだから」

「僕たちまだ付き合っていないし、今日会ったばかりだから。……ゆあさんに、後悔してほしくもないし、嫌われたくもないんだ」

「じゃっ、じゃあ！ 付き合えばいいんだもん！」

「え？」

思わず口から飛び出した自分の言葉に、結亜はお酒を飲んだ以上に顔が赤くなる気がしていた。

「……あー……。これは、ズルいな」

「え……？」

結亜のまつすぐな瞳を見て、ハルトは小さく溜息を吐き、片手で自分の顔を覆った。

『酔っ払ってました、ごめんなさい』とか『勢いで言っちゃいました、嘘です』とか、酔いが冷めた後にそう言うのはなしだからね？」

「わ、わかってるよお……」

「僕から言うタイミング逃しちゃったな。でも、せっかくゆあさんが言ってくれたんだから、今日はそのでいいか。改めて僕からも言わせてもらうからね？」

「それは、嬉しい」

「良かった。……ゆあさんの許可も出だし、お互い好きなら遠慮なく」

「……わわっ！」

彼は結亜をそっと抱き上げた。お酒のせいだけではない、確かな熱と鼓動を感じながら、二人の夜が深く始まるうとしていた。

ハルトは結亜をそっと抱き上げ、すぐ近くのベッドへと運びその上に下ろした。

「前言撤回はなしだよ？」

「……わかってる」

「忠告はしたからね？」

「もう……何度も言わないで……」

結亜は恥ずかしそうに、目を逸らした。

「そりゃあ、大切にしたい人の前では慎重になるものだよ。出会ったばかりなんだ。この後に挽回の余地がないかもしれないからね」

「大丈夫です……っ！」

ハルトの言葉はどこまでも慎重だった。そして、その慎重さの中には、結亜を傷つけまいとする真摯な熱が宿っている。

ハルトは熱いままざざして結亜をまつすぐ見つめた。

「後悔、しないでね？」

そう言つて、ハルトは横になつた結亜を押し倒すように覆いかぶさる。ギシリと軋むベッドの音が、彼女の心臓の鼓動をさらに跳ねさせる。

「……んんっ」

重なつた唇から、熱い吐息が流れ込む。

「――怖がらないで。大丈夫つて言われても、やっぱり怖いかな？」

耳元で囁くハルトの声は、低くて落ち着いた大人の男性の響きだ。

お酒の力もあつたが、引き返すタイミングはいくらでもあつた。それでも結亜は、彼と一緒にいることを選んだのだ。

「力を抜いて、不安だつたら僕にしがみついていいから」

言われた通り、結亜はハルトの首元に腕を回した。

(……怖いわけじゃない。でも、このほうが安心する……)

爽やかで落ち着く、ハルトの匂い。結亜は目を閉じ、彼の香りに包まれることにした。

「……あっ……」

ハルトの指がそつと耳孔をなぞり、思わず声が漏れる。くすぐつたいような、脳を直接揺さぶられるような刺激に、反射的に身を固くした。

「そんな可愛い反応をされたら、僕もあんまり落ち着いていられないかな」

「ハ、ハルトさ……んん……っ」

ハルトは結亜の耳たぶを軽く噛み、熱い息を吹きかけた。

「ううう、んん……ッ」

「耳、弱いね？」

「そ、そんなことは……」

「あるんじゃない？ ……ほら」

「んあ——っ！」

面白がるように舌でなぞられ、結亜の肩がピクリと跳ねる。

「あ、あ、お、お風呂……！ は、入らなきゃ……！」

「お風呂？ 今入ったらアルコールが回つて危ないよ。……でも、ゆあさんが気になるなら……一緒に入る？」

「い、一緒に!？」

「お風呂で倒れでもしたら困るからね。シャワーで汗を流すだけなら、手伝つてあげるよ」

「で、でも」

「滑つて怪我をしたら大変だから、一緒に入るよ。おいで？」

「……う」

ハルトの有無を言わせぬスマートな提案に、結亜は抗えなかつた。

フラフラの自分をここまで連れてきてくれたのは、彼なのだ。

「ほら」

身体を起こしたハルトが、まだ横になっている結亜に両手を伸ばした。

「……」

悩んだ末にその手を取り、身体を起こす。

「お風呂は廊下かな？ 行こう」

「う、うん」

もそもそとベッドから降りて、引かれるままにハルトの後をついて行く。

脱衣所に貼られた手作りの『洗面所』というプレートを見て、ハルトが「可愛いね」と微笑む。

「はい、どうぞ」

「あ、ありがとう」

浴室前の洗面所のドアを開け、結垂に入るよう促した。自分の家にもかかわらず、おずおずと中へ入った結垂は、チラリとハルトのほうを見る。

「……どうかした？ ここだよね？」

「え、あ、うん。あつてる、けど」

「何だい？」

「う……一緒にいる、んだよね？」

「よく慣れた自宅とはいえ、今のゆあさんを一人にするのは危ないからね。……別に、お風呂場で襲ったりしないよ？」

ハルトはあっけらかんと答えた。

「なっ……！」

「気にしてるんでしょ？ さあ、ささっと洗って出よう？ 風邪を引いたらいけないからね。僕はあくまでも、少し手伝うだけだから」

ニコニコと話すハルトに負け、結垂はゆっくりと服を脱ぎ始めた。

「……って、なんでハルトさんも脱いでるの!？」

「なんで……って、手伝うんだから僕も一緒に入るよね？ 服脱がないと、濡れちゃうよ？」

「あ、そう、ですね……」

（そうじゃん……そんなの当たり前じゃん……）

当たり前の返答に、結垂は自分の動揺が恥ずかしくなった。ごまかすように急いで服を脱ぐが、ふと隣を見ると、上半身が露わになったハルトの引き締まった身体に結垂は思わず目を奪われた。

（え、すごい！ 筋肉がしっかりついているのに、それでも細くてすらっとして……）

「何、見るの？」

「え、すごいなって。……って、ごめんなさい、急にジロジロ見ちゃって」

「それくらい大丈夫だよ。これから何度も見ることになるんだから。なんなら、触ってみる？」

「ええっ!？」

ハルトは結垂の手を取り、自分の腹部へ導いた。

「……硬い」

結垂は思わず筋を指でなぞる。

「一応、鍛えてるからね。……風邪引くよ？ 行こう」

「う、うん」

浴室の電気をつけて、ハルトは結亜と共に中へ入った。シャワーの音が響き渡る中、浴室が白い湯気に包まれた。

「暖かくなってきたとはいえ、まだまだ夜は冷える日もあるからね。さっと出ちゃうよ」

「うん、わかってる。あ、自分で洗うから!」

「ふふふっ。僕が洗ってあげてもいいんだよ?」

「いきなりそんなことは……! 恥ずかしいから!」

結亜は必死にボディソープを泡立てると、急いで身体を洗った。ハルトも同じようにボディソープを手取る。ふんわりと、ボディソープの良い香りが湯気に乗って舞う。

「……あの、ハルトさん、先に出て待っててくれる? ……メイク、落としたいくて。あんまりその、見られたくないというか……」

「わかった。じゃあ、先に出てるね。タオル借りるよ」

「うん! 洗濯機の上の棚に置いてあるから、好きに使って」

ハルトが脱衣所へ消えると、結亜は鏡の前でクレンジングミルクを手を取った。

(……私、何してるんだろ?)

鏡に映る自分は、お酒のせいaka頬が上気している。

(私もちよっと、ダイエツトしようかな? そんなに太ってはないと思うけど。お腹ってお肉、絶対つきやすいよね)

少しだけお腹の肉を摘み、ふうと小さく溜め息を吐いた後、結亜はそっと浴室のドアを開けた。

「おかえり」

腰にタオルを巻いただけのハルトが待っていた。

「ただいま」

「はい、タオル。これで良かった?」

「うん、ありがとう」

ハルトからタオルを受け取り、身体を拭き始める。その間、彼は結亜を気遣うようにさりげなく背を向けてくれていた。

その優しさを嬉しく感じながら急いで身体を拭くが、結亜は着替えを持ってくるのを忘れたことに気付いた。

「あの、拭き終わっただけけど……下着とか、部屋から持ってくるの忘れちゃった」

「このまま戻ればいいよ。バスタオルを巻いていれば大丈夫だよ。それじゃあベッドへ戻ろうか、お姫様?」

「わっ!」

洗面所のドアを開けたハルトは、驚く結亜をひよいと抱き上げた。

いわゆるお姫様抱っこの状態でベッドへと向かう途中、結亜の心臓は激しく高鳴った。

身体に巻きつけただけのバスタオルは心許なく、その短い裾からは結亜の太ももが露わになっていた。ハルトの逞しい腕が結亜の柔らかな脚を直接支えている。

互いに素肌のまま密着しているせいで、彼の体温がダイレクトに伝わってきて、結亜は逃げ場のない熱さに顔を火照らせた。

「……っ、ハ、ハルトさん……!!」

気恥ずかしさに耐えきれず、結亜は縋るように彼の首筋に細い腕を回し、顔を埋めた。

「お、重いよ! 私、重いから下ろして……!!」

「全然? むしろ、ゆあさんはもう少し食べてもいいと思う」

「いやいやいやいや、そんな!」

(……そんなことないんです!)

自分の重さをしつかり腕の中で量られている気がして、結亜はたまらなくなり、ハルトの腕の中から抜け出そうと身をよじった。

「……あっ! 危ないからじっとしてて? あんまり動くと落ちてしまうよ!」

結亜を抱えるハルトの腕にグッと力がこもった。

その腕は驚くほど硬く、結亜はハルトが男性なのだということを改めて突きつけられた。その力強さに、胸の鼓動がさらに速くなる。

(う。……おとなしくしてなきゃ……)

結亜は降参したように、おとなしくその首筋にしがみついた。

「わかってもらえたかな? ……もう着いたから、降りても良いよ?」

ハルトはゆっくりと、結亜をベッドに下ろした。その瞬間、ハルトの瞳の奥に宿る熱が一気に深

まった。

「……ところで。もう、逃げ出すのはなしだよ? 覚悟は決まってるよね」

「えっ」

少しだけ意地悪な響きを含ませて、ハルトは結亜の髪の毛を指ですくい上げると、愛おしそうに口づけた。

至近距離で見つめてくる彼の熱い視線に、結亜は心臓が止まりそうになる。

「ゆあさんから、僕と同じ匂いがする」

「そ、それは、ハルトさんが私のボディソープを使ったから……!!」

「不思議だね。自分には何も思わないのに、ゆあさんから漂うとすごくいい匂いに感じる」

「えっ、えっ……!!」

「……美味しそう」

「っ、あ……んっ……」

ペロリと唇をなぞり、ハルトは結亜の首筋にゆっくりと舌を這わせた。

「ああ……ん、んん」

「本当に、美味しそう……」

「ハ、ハルトさん……」

「せつかく洗ったのに、すぐに汚しちゃうけど……良いよね?」

結亜の答えを待たず、ハルトは舌をゆっくりと動かしながら、吸いつくように首筋をなぞって

く。熱い刺激に結亜の身体がピクピクと跳ね、我慢しきれない吐息が漏れる。

ハルトは結亜のその初々しい反応を楽しむように、何度も首から鎖骨にかけて甘い痕を残すようにキスを繰り返した。

急な愛撫に結亜は戸惑いつつも、抵抗する気になれなかった。ただ、身体の奥から湧き上がる熱に耐えかねて、何かを求めるかのようにハルトの身体を指で掴んだ。

「あ、うう」

「……」

無言のまま、ハルトはさらに深く、彼女の熱を確かめるように結亜の身体に唇を這わせた。

同時に吹きかけられる息がくすぐったくも気持ち良くて、無意識のうちに結亜はハルトを触る指に力を入れていた。

「……身体、冷えちゃうかな？」

愛撫をやめて、ハルトは結亜を優しく抱き締めた。湯舟に浸からずにシャワーだけで済ませた身体は、お互い既に冷えていた。けれど、密着した肌からじわじわと熱が走る。

「でも、ハルトさんどくつついていたらあつたかいから大丈夫、かな？」

「あはは、それはそうだね。僕も、ゆあさんとくつついてるところは温かいよ」

「なんだか、こうしていると落ち着いちゃうな」

「落ち着いて、そのまま寝ちゃわないでよ？」

「だっ、大丈夫だもん！」

強がる結亜に「それならいいけど？」と微笑むと、結亜の身体を隠していたバスタオルがハルトの手によってパサリと外される。

「あっ」

思わず手繰り寄せようとした結亜の手は、ハルトの手によって簡単に阻まれてしまった。

「恥ずかしい？」

「そりゃあ……何も隠すものがないし……」

「電気はつけていないんだから、いいってことにしてくれないかな？ ……僕に見られていると思うのが嫌なら、目を瞑っていてもいいよ？」

「わっ！」

ハルトの大きな手のひらが、結亜の目元をすっぽりと覆った。

「怖い？ 大丈夫だよ、安心して。そのまま目を閉じていて。ゆっくり呼吸して、僕を感じて」

言われた通り、結亜は目を閉じた。視界が真っ暗になり、感覚が鋭敏になる。

目元を覆うハルトの手の温かさをじんわりと感じながら呼吸をすると、いつの間にか強張っていた身体力がスツと抜ける。

「いつでも目を開けていいからね。僕はここにいるから」

「う、うん」

ハルトは結亜の目元から手を外すと、今度は指先で彼女の柔肌をなぞりはじめた。顔から耳、首筋、鎖骨。そして――

「んんっ……！ ふ、う、う」

結垂から漏れる声に合わせて、ハルトは指の動きに緩急をつける。

「ん、あ……」

「ねえ、ちゃんと反応してくれるから、嬉しいよ」

「うあ……だ、だっつ」

「こことか特に、触ってほしそうだね」

「ふあっ！」

声が出ると同時に、身体も跳ねた。

「僕に触られるのが、そんなに気持ち良いの？ それなら光栄だよ」

ハルトが指の側面で結垂の乳首をこすり、親指を添えて軽く摘まんた。既に隆起していた先端は、ハルトの動かす指の中でプニプニとその形を変えている。意地悪く伸ばしたり、押し込んだりと、まるでハルトのオモチャにされているようだった。

「あっ、あっ……」

「身体がビクビク動いてる。……じゃあ、これは？」

「え、あっ、ああっ——！」

乳首を弄る指が離れたかと思うと、今度は胸をもみ潰すように手のひらで掴まれた。

ハルトはその先端を口に含むと、そのままゆっくりと飴玉を転がすように舌で丁寧にあ撫する。

口の中で形を変える乳首の感触が、ハルトの舌を楽しませた。

舌先で転がし、唇で挟み、吸いついて引つ張る。時々歯で軽く噛み、グリグリと舌の腹で押しつぶした。

「うあ、ん……っ、あああ……」

それにあわせて面白いように反応して声を上げる結垂が、よりハルトの中の激情を駆り立てているようだった。

結垂の反応を楽しむように、わざとらしくピチャピチャと淫らな音を立てて吸い上げる。

「はあ、はあ、はあ……ああ……っ」

あっという間に結垂の息が乱れていく。

「……次は、こっちもいいかな？」

「っああ、んっ！」

「あ、はは。すごく濡れてる。まだ乳首を少し弄っただけなのに、ゆあさんは敏感なんだね」

スルスルと伸ばされたハルトの手が結垂の秘部を捕らえた。入口を優しくなぞる指に、結垂は思わず脚を閉じようとしたが、ハルトによって脚を大きく開かれたまま固定されてしまう。

「そ、そんなこと……っ、あう……っ！」

「そんなこと、ない、だなんて言わせないよ？」

「んんっ……ああっ、ふっ……うっ……ううう……」

「わかる？ 入口を撫でているだけなのに、中からどどん溢れてきてる。指がそのまま入っちゃいそうだ」

「あつあつ、ああつ！」

そう囁きながら、ハルトはグプグプと指を押し入れていく。

「……あーあ、入っちゃった。すごいよ、ズブズブって、奥まで飲み込まれていくの」

「うう……や、やだ……」

「えっ、もしかして痛い？ ごめんね？」

「ち、違うの……。そ、その。恥ずかしいから……言われるのが……」

「……ああ、そういうこと。でも、やっぱりごめんね？ そう言つて恥ずかしがるゆあさんも見た
いんだ」

中指も追加され、グチャグチャとわざと音が立つようにナカを掻き回される。長くて骨ばった指
が粘膜を擦るたび、結垂はその身を震わせた。

「これからもっと、気持ち良くしてあげる」

ハルトは唇にキスをして起き上がると、指ですくった愛液をクリトリスへと塗り広げた。

「んんっ！」

「クリも硬くなってる。コリコリしてるから、きつと真っ赤だね」

「あつあつあつあつ」

「触られるの好きなの？ 腰が浮いてる。……ほら、自分の腰で僕の指に自分でクリを押し付けて
くるなんて、もっと擦ってほしいんだね」

「あつ、ああつ、ちっ、ちが……ああ……」

ハルトの指が動くたび、結垂は身体を小さくよじらせた。

「いいよ、イクまで撫でてあげる」

「ううううう……あつ、ああ……っ、ひっ、いつ……っ！」

「あー……すぐ気持ち良さそう。もっと強くしてもいい？」

さらに指に力が込められる。

「ひあつ……っ！」

「安心してね。いっぱい気持ち良くなつていいから」

(ダメ……っ！ こ、これじゃ、すぐに、すぐにイッちゃう……っ！)

一定のリズムと強さで執拗に擦られ、結垂は快樂の限界を迎えた。

頭の中に閃光が走り、身体が緊張と弛緩を繰り返す。上り詰めた熱が一気に解放された。

「っ、う、はあ……ああ……っ、ああ……はあ……はあ……っ……」

「イッた、のかな？ すぐく身体が震えてるし、挿れてただけの指を締め付けて……クリだけでも
十分すぎるほど気持ち良いんだね」

「え、あ……」

「でも、もう一回、気持ち良くなるうか」

ハルトは素知らぬ顔で、再び結垂のクリトリスに指を添えると上下に動かし始めた。

「まっ、ま、つて……っ！ う、んんっ……っ！ イッ……た、ばっつかり、だから、あ……っ……っ！」

「知ってる」

グブグブと片方の手は膣の中で指を内壁に擦りつけるように刺激し、もう片方はクリトリスを撫でる。

「んんんっ」

「ねえ、またナカがトロトロになつてきたよ？ それに、いっぱい動いているのわかる？」

「あああ、ん……」

（ハ、ハルトさん、こんなキャラだったの……？）

彼のことを穏やかで、どちらかというと奥手な人だと思い込んでいた結亜だったが、それは間違っていた。

ハルトは今、剥き出しの本能を臆することなくさらけ出している。

そんな彼のオスの表情に、結亜はすっかり翻弄されていた。

「……こうやって潰してみたら、気持ち良いのかな？ ナカと外から、指でグリグリ……っ」

そう言つて、ハルトはナカからも外側からも挟み込むように刺激を与える。愛液にまみれた隆起が、指の間でちゅるちゅると逃げるように形を変えている。

「んんんっ……！ あっ、あああ……っ」

「指が良く滑る。いっぱい濡れてるもんね」

さらに快楽を一点に集中させ、クリトリスの表面だけを高速で愛撫していく。敏感な部分から頭の方、足の先まで一気に伝わっていった。

「だめっ、だめえ、っ……あああああ——！ ——うう——！」

「——ああ、イッチャった」

ビクビクと全身を震わせて、結亜は二度目の絶頂を迎えた。自分の指やオモチャでもなく、久しぶりに感じた人のぬくもり。

「僕も、いいかな？」

「うー……うう……」

腰に巻いていたタオルはとつくにはだけけていて、彼の大きく隆起したイチモツが露わになっている。ハルトは結亜の秘部へその先端をピタリと当てた。

「これ。これが今からゆあさんの中に入るよ。触ってみて？」

「あ……」

ぐったりとしていた結亜の手を取ると、自分のモノを握らせた。

（え。——ええ!?）

結亜はハルトのソレが、今まで付き合ってきた男性の誰よりも逞しいことに気が付いて戦慄した。

「え、は、入らな……」

「入るよ。ゴムはするから、安心して」

「え……ゴム？」

「……さっき君がコンビニに寄った時に買ったんだ」

「そ、そうだっけ……？」

まだ頭がぼんやりする中、ハルトは手際よく準備を進める。

立ち読みサンプル はここまで

「僕、イッた後のナカに入れるのが好きなんだよね」
「んっ、いいっ、いいい……」

再度敏感になった部分を刺激され、結亜はコクコクと頷くしかなかった。ハルトが優しく髪を撫でると、結亜は覚悟を決めて目を閉じた。

（私、どうしちゃったんだろう……。でも、どうしても、この人を拒めない……）

さすがにここまで来れば、飲み過ぎていた結亜の意識もだんだんと覚醒し始めていた。

彼に抱き上げられて自宅へ運ばれ、一緒にシャワーを浴び、隅々まで身体を愛でられる。今日出会ったばかりの男性と、今まさに最後の一线を越えようとしている自分。

ふと冷静な思考が頭をよぎるものの、ハルトの逞しい身体を間近に感じると、そんな迷いは一瞬で霧散した。

暗がりで見つめ合う。ハルトの整った顔立ちが改めて自分好みだと実感する。

ゴムをつけたハルトと目が合うと、そんなことを思っていたのを見透かされたような気がして、結亜は思わず目を逸らした。

「どうしたの？ 僕の顔に何かついてる？」

「えっ、あ、ううん……」

「そんなに見られたら、僕もちよっと恥ずかしいかも」

「べ、別に！ 見てないです！」

慌てた容姿の結亜に、ハルトは小さく笑って答えた。

「そんなに否定しなくてもいいのに。僕のことをもつと見て。そして、知って？」

「え、あ……」

ガダガダと考えるのもうおしまいだ。

ハルトがまとう落ちていた匂い、触れられた肌に残る痺れるような熱、そして自分を壊してしまいたいようなほどの力強さ。

そのすべてに結亜は抗うことができず、甘い絶望を感じながら、静かに彼を受け入れる覚悟を決めていた。

ハルトが結亜を自分の元へゆっくりと引き寄せる。至近距離で対峙すると、どうしても彼の大きく熱い楔くわが視界に入り、目が離せなくなる。

「……欲しい？」

「そ、そうじゃなくてっ……！」

「じゃあ、どうなの？ もう準備は十分すぎるほど整ってるみたいだけど？」

「……っ」

ハルトの指先が、しつとりと濡れた秘部の入口を優しく割り込ませるように撫でた。結亜は羞恥に身を震わせたが、逃げるつもりなんてさらさらなかった。

むしろ、じわじわと攻め立てる彼の手を、自分から迎え入れたいと思っていることに気付いてしまっ。

「怖くなった？ もし嫌ならここでやめよう。無理強いはしたくないんだ」